

蛇つかひ

鈴木三重吉

青空文庫

インドだのエジプトだのといふやうな熱帯地方へいきますと、
 蛇へびつかひ使つかひと言つて蛇に
 ろ／＼のことをさせて見せる、わたり歩きの見世物師がゐます。たいてい五六人で組をつ
 くつて、ありとあらゆるさま／＼の蛇のはいつた、籠かごや袋や箱をかついで、町から町へ
 とめぐつて歩き、人どほりのおほい広場や空地で、人をあつめて見せるのです。人がい
 かげんにあつまりますと、蛇つかひはいづれも地びたにすわつたまゝで、中の二三人が、
 タンブーリンといふ、鈴のついた手太鼓をポン／＼チャリン／＼とならし出します。それ
 と一しよに、ほかの二人は、へんな薬の草を口へ一ぱい入れこんで、ふう／＼と、あたり
 一面へ、薄荷はくかのやうなきついにほひのする烟けむりをはき出します。

そのうちに蛇つかひたちは、袋や籠かごをあけて蛇をとり出します。すると蛇は、たちまち
 しつぽの方でからだをさゝへて立ち上り、によろ／＼と上体をゆすぶりながら、タンブー
 リンの音ねに合はせて、にじり歩いてをどります。見物人は、それを見ると、はつはとよろ
 こんで、お金をなげていくのです。

しかし、それらの蛇使は、そんなをどりを見せるばかりでなく、ときによると人の家うちへ
 出かけて戸口や窓をくん／＼鼻でかぎまはしたあげく、このお家うちには蛇がゐるなどと言ひ

ふらします。すると、家の人は気味がわるくなつて、では、どうぞつかまへていつてくれろと言ひます。そこで蛇つかひは、またタンブーリンをたゞき、れいの薄荷のやうなにほひのする烟をもうくと立て、シツ／＼シツ／＼と言つて、おびき出しますと、ふしぎにも、家の中にかくれてゐた蛇が、すぐによろ／＼とはひ出して来ます。蛇つかひはそれをつかまへてお金をもらひ、とつた蛇も袋に入れてもつていくといふやうなこともします。

或ときアフリカのカイローといふ町に、さういふ蛇使で顔の売れた、アプト・エル・ケリムといふ男がゐました。そのケリムが、或日その町のフランスの領事館のそばをとほりかゝりました。そしてふと立ちどまつて、その建物の入口をじろ／＼のぞいたり、窓を見上げたりして、しきりにくびをひねつてゐました。領事館の小使がそれを見て、どうしたのだと聞きますと、ケリムは、いやたいへんだ、この家の中には大きな毒蛇がどつさり住んでゐると言ひました。小使はびつくりしてそのことを領事のデラポールトに話しました。デラポールトは、もうそこはかなり永く住んでゐるのですが、これまでそこいらでむかや、さそりといふ毒虫を見つけたことはありませんが、まだ毒蛇は、小さいのをすら、一びきも見ることがありません。ですから、その話をきいても、じょうだんだらうと言つ

て、とり上げませんでした。しかし、そばにゐあはせた人たちは、だつて、もしほんとうに蛇がゐたらどうします、だれか喰くひつかれでもしたら、あとで悔んでも追ツつかないでせう、ともかく、その男に一おう見ておもらひなさいと、しきりにさう言ひました。

それでデラポールもその人たちにたいして、仕方なしに、ケリムをよび入れました。

はいつて来たのは、ぶく／＼した黒服に青いづきんをかぶつた、五十ぐらゐの年ばいの、どことなく威げんのある、しごくまじめさうな男でした。ケリムはデラポールのまへに出て来ると、胸の上に手の平をくみあはせて、ていねいにおじぎをしました。デラポールは土地の人とかはらないくらゐ上手にアラビヤ語を話しました。

「いらつしやい。何だかこの家のうちの中に毒蛇があるといふことだがほんとうですかね。」と聞きますとケリムはくびをかしげて、しばらくく／＼鼻をならした後、

「はい、をりますです。」と、しづんだ調子で言ひました。

「へえ？ 毒蛇が？」

「はい。」とケリムは、ふた／＼び鼻をく／＼言はせて、

「だいぶゐるやうです。少くとも六ぴきはをりますでせう。」

「ほ／＼？ ではつかまへてくれますか。」

「はい。私がよびますと、わけなく出てまゐります。」

「ふゝん？　では、さつそくよび出して見て下さい。」

「はいく。」とケリムはおじぎをして、ちよつとその部屋を出ていったと思ひますと、間もなく仲間のものを三人つれてはいつて来て、四人で床の上にあぐらをかきました。そのうちに、ケリムのほかの三人はタンブーリンをひぎの上におき、れいの薄荷のやうなほひの出る薬の草を口にふくんで、

「アラ、く、く。」と、さげびながら、ふうく煙をふきはじめました。ケリムはその間、シツくシツと口笛をならすやうな音を立て、蛇をよびつけました。四人は四五分間もそれをつづけてゐましたが、蛇はてんで出て来さうにもありません。

デラポールトは、何をするんだいと、半分はばかにしながら、なほすこしの間がまんして見てゐますと、間もなく、いくつものさそりがぞろぞろと部屋の壁の上や、いすの下からはひ出して来ました。デラポールトはそれを見ると、

「あッ。」と言つて立ちすくみました。と、まだく出ます。こんどは窓の日よけや、デラポールトのベッドの上の蚊帳なぞをつたはつて下りて来ます。すべて二十ぴき以上もあるでせう。それがみんな、のそく走つて、ケリムのひぎのところへあつまりました。

ケリムはそれを両手ですくひ上げては、羊の皮の袋の中へおし入れくしました。そして、「どうぞです。」と、いふやうに、デラポールの顔を見上げました。

「なるほど。しかしそれはみんなさそりばかりで蛇は一ぴきもゐないぢやないか。」とデラポールトは言ひました。

「いえ、蛇もをります。」

ケリムはかう言ひながら、こんどは、先^{せん}とはちがつた音色でシツくくくとよびたてました。同時に、三人のものは、アラーくくと烟をはきながら、タンブーリンをチャリンくポンくくならしました。

すると、間もなく、デラポールの寢床のあたりから、ケリムのあいづと同じやうに、シツくといふ声が出しました。と思ふと長さ四尺以上もある蛇が、によこりと寢床の下から出て来て、するすると、ケリムの方へ走りよつて来ました。よく見るとその蛇は、アラビヤ人がタバリックと言つてゐる、コブラ・カベラといふ毒蛇です。ケリムは、そのおそろしい蛇をむぞうさにつかまへて、袋の中へおしこまうとしました。

「おい、ちよつと待つた。」とデラポールトはさへぎりとめました。

「何でございます。」

「はッは、その蛇はほんとにこの家うちにゐたのかい。」

「ごらんのとおりです。」

「よろしい。ほんとに私わたしのうちにゐたものならば私のものだ。その蛇はおまいの袋たななぞへ入れないで、こつちへおくれ。」と、デラポールトは、そばの棚たなの上から、口の大きな、びんをとり下おろしました。中にはアルコールがはいつてゐます。言ふまでもなく、動物の標本用のびんで、とき／＼漁師たちが、ナイル河からきたいな魚をとつてもつて来るのを、入れるために用意してあつたのです。

「さ、この中へ入れてくれ。」

「それは、しかし……」

「何がそれはしかしだ。私わたしの家うちの中うちにゐたものなら、どこまでも私のものぢやないか。おまいにはとにかく三十ピアスターのお金を上げるから、蛇だけはだまつてこの中へお入れなさい。それをぐづぐずお言ひだと、へんなことになつてしまふよ。そのわけを話さうかね。」

ケリムは、かう言はれて、しぶくとその蛇をびんの中へ入れこみました。デラポールトは、手早くそれへキルクの口をして、その上をくるくとかたくしばりつけてしまひま

した。

「もうありませんか。」

「まだをります。」

ケリムは、最初六ひきはたしかにみると言つた手まへ上、そのまゝ引つこんでしまふわけにはいきません。それでまたすぐに、ポン／＼チャリン／＼、シツ／＼と、よび声やタンブーリンの音を立て、つぎの蛇をよびました。

するとこんどは前のよりは少し小さな蛇が、ひきだし台の下からのそ／＼はひ出して、ケリムのそばへ走つて来ました。

デラポールトは、またすぐにそれをほかのびんに入れさせて口をしました。

「さあ、これで二ひきになつた。もうゐないかい？」と聞くきますと、ケリムは、しづりきつた顔をしながら、

「この部屋にはもうをりません。」

「では、どこにゐる？」

ケリムは、つぎの応接間の方を向いて、

「あすこに一ひきゐるやうなほびがします。」

「ぢや、いつて見よう。」

デラポールトは、つぎの大きなびんを二つ両わきにかゝへ、小使にも二つもたせて、どん／＼応接間へはいつていきましました。ケリムはこまり切つたやうな顔をしながら、その部屋からも一ぴきよび出しました。その蛇は音楽ずきの蛇だと見えて、ピアノの下から出て来ました。デラポールトはようし、と言ひながら、ケリムがいやさうな顔をするのもかまはず、さつさとびんの中へ入れさせました。

「これで三びきだね。あともう三びきはどこにある？ え、おい。」

「あとはおだいどころにをります。」と、ケリムは泣き出しさうな顔をして言ひました。

「さあ、いかう。」とデラポールトは先に立つていきましました。ケリムは、またそこでしばらくと、れいのおひづをしました。すると、大きな水をけの下から一ぴきはひ出しました。「ようし、よし。さ、この中へ入れてくれ。これで四ひきだ。さあ、あと二ひきを早くお出し。これ／＼小使、つぎのびんの口をあけておけ。」

ケリムはとう／＼こまつて、思はず、

「エンタ、タフェツスド、セナー。」ときげびました。それはアラビヤ語で、「ほんとに、ひどい、人いちめだ。」といふ意味でした。ケリムは、この上、ていさいを作りとほさう

とすれば、あとの二ひきの蛇も、みんなデラポールトにとられてしまふので、

「どうぞ、もう、あとはお許し下さいまし。」と、とう／＼本音をはきました。デラポールトは、くすくす笑ひました。でも、あまりかはいさうなので、あとの二ひきはかへしてやり、その上、三十枚の銀貨をくれておひ出しました。ケリムは、そのお金を、引つたくるやうにしてポケットへ入れて、

「ちよッ。あのよくなれた蛇四ひきを三十ピアスターでとられちや合はないや。」と、うらめしさうにぶつ／＼言ひ／＼出ていきました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第六巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1923（大正12）年7月

入力：tatsuki

校正：林 幸雄

2007年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蛇つかひ

鈴木三重吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>